

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

多文化保育におけるリトミックに関する一考察

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮崎, 真利子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000059 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



多文化保育におけるリトミックに関する一考察

A Study on Eurhythmics in Multicultural Childcare

宮崎 真利子

MIYAZAKI, Mariko

1. はじめに

近年、保育園では多様な文化背景を持った子どもが増加し、その対応に戸惑う保育者は少なくないだろう。三菱UFJリサーチ&コンサルティングが2020年に行った全国の保育園・子ども園を対象にした調査によれば、回答のあった約7割近くの園が外国籍の子どもを受け入れている¹⁾。林(2023)によれば、多文化保育に対する自治体による支援はまだ十分とはいえない状況である²⁾。筆者がリトミックを行う保育園でも、外国にルーツを持つ子どもが在園し、活動を行う中で、様々な問題に出くわす。リトミック指導者も、活動の補助をする保育者も、その対応に試行錯誤しながら活動をしている。外国にルーツがある園児の問題は、個々によって異なるため、十分に対処することができないまま活動が終わってしまうことも少なくない。リトミック指導者が、保育園での集団における指導の中で、異なる言葉や文化背景を持った子どもの個性や表現力を引き出すためには、どのような多文化保育に対する理解や取り組み、心構えが必要なのだろうか。本稿では、筆者が指導を行う保育園の、3歳児以上クラスのリト

ミックの問題事例を取り上げ、多文化保育におけるリトミックの問題点を整理する。そして、リトミックの創始者のエミール・ジャック＝ダルクローズ(1865-1950)の教育や多様性に対する考え方や、今日の多文化保育への取り組みや研究を基に、その問題解決となる手がかりを見つきたい。

2. 外国にルーツをもつ子どものリトミック活動における問題点

筆者が指導を行う保育園では、毎週定期的な各クラス6～20名前後を対象に、リトミックを行なっている。活動時間の内訳としては、年少組クラス20分、年中組以上のクラスは25分で、時間内に3～5項目の課題と活動を行っている。外国にルーツを持つ子どもの割合は、1クラスに平均1～2名程度と少数であるため、日本語で活動を行なっている。

外国人または外国にルーツを持つ子どもが、保育園でリトミック活動を行う上で起こりやすい問題としては、主に「言語」と「人間関係」が挙げられる。

まず、言語に関しては、個人差があるものの、活動を行う上でハンデになっている。父親の仕事の関係で日本に数ヶ月間滞在した外

キーワード：多文化保育、多様性、リトミック

Keywords : multicultural childcare, diversity, eurhythmics

国人園児は、日本語を聞き話すことが全くできず、指導者、園児ともに意思疎通に苦労した。当初、園児はリトミックに参加しようとする意思すら示さなかったが、保育者の協力もあり、回を追うごとに参加するようになっていった。指導時は簡単な英単語やジェスチャーを使って説明し、活動中は保育者が個別に付き添い、他の園児の活動を模倣してもらった。言語の問題があったことにより、園児自身がリトミックを楽しめたかは疑問ではあるが、保育者や他の園児のコミュニケーションの一助になったのではないだろうか。

また、日本で生まれ育ち、日本語でのコミュニケーションにほとんど問題がない外国人園児でも、断片的に指導者の説明が理解できていないケースが見られる。本人が「わからない」と申し出れば、さらに噛み砕いて説明することができるが、ほとんどの場合は十分に理解できていないまま、周囲に合わせるか、園児自身の解釈で行動していることが多い。指示の仕方によっては誤解や勘違いを招き、異なる動きをすることで他の園児とのトラブルに発展している可能性もある。

次に、人間関係に関するトラブルは、年中以上のクラスで多く見られる。周りに配慮ができなくなるほど活動に夢中になるあまり、身体表現が過剰になってしまう。そのため、一緒に活動している園児や指導者・保育者が不快に感じてしまう場面が少なくない。例えば、身体の動きや力加減をコントロールしきれず、近くで活動をしている園児にぶつかってしまい、喧嘩を始めてしまう。また、人の目を惹くために大声で叫び、動きを誇張し、指導者を独り占めにして話しかけようとする。これらの行動は、本人の性格や気質から来るものなのか、または言語理解による勘違いに

よるものなのか、判断に苦しむところではある。

一方、クラスのお手本になるような、独創的で豊かな表現を見せることもあり、「豊かな表現」と「過激な表現」の境界線の難しさを感じている。保育園の集団活動でのリトミックにおいては、その「違い」を「ルールに従っていない」と指導者、保育者ともにネガティブな行動に捉えてしまい、その結果、本人の個性を十分に活かさきれていないことがある。

ここで取り上げた問題は日本人の園児にも起こりがちな問題でもあるが、外国にルーツを持つ園児の場合、クラスの活動が中断するほどの大きなトラブルに発展することが多く、個人の性格の問題だけではなく、異なる言語や文化、生活習慣が影響しているのではないかと考えられる。

指導者には外国人の子どもの性質を理解し、多様性を肯定的に受け止め、リトミックの活動に活かすことが求められている。

3. リトミックにおけるコミュニケーション

多文化保育におけるリトミックでは、指導者はどのように園児同士とコミュニケーションを取れば良いのだろうか。ヴァンドレスパーがリトミック教育の指針を示した『ダルクローズのリトミック (Dalcroze Handbook)』の、第2章「リトミックにおける教育原理」を基にその方法を検討する。

まず、ヴァンドレスパーは、コミュニケーションの方法として、

- ・聴覚によって理解される、言葉によるコミュニケーション
- ・聴覚によって理解される、音楽によるコミュニケーション

- ・視覚によって理解される、顔の表情によるコミュニケーション
- ・視覚によって理解される、身体表現によるコミュニケーション
- ・文脈の中で視覚によって理解される、記号によるコミュニケーション
- ・触覚によって理解される、接触によるコミュニケーション³⁾

と定義している。ヴァンドレスパーは、伝達者のメッセージは明快に伝達されるべきであり、受け取る人がそれを理解できるものであることに気を配らなくてはいけない、と注意を促している⁴⁾。そして、ヴァンドレスパーは、レッスン中に指導者が作ってしまう妨げの原因として、「コミュニケーションの方法の誤った選択」と「くどくどした長すぎる説明」を挙げている。このことから、特に外国人の園児がいるクラスでは、わかりやすい説明を心がけながら、顔の表情や所作にも配慮する必要がある。

さらに、ヴァンドレスパーは、レッスン中に起こりうる妨害として、

- ・強制的にレッスンに出席させられた場合
- ・個人的な問題を抱えているような状態
- ・コミュニケーションの手段がない場合

を挙げている⁵⁾。保育園での生活の一部としてリトミックを行う場合、本人の意思にかかわらず、参加している状況もあるだろう。特に外国にルーツを持つ園児は、普段のクラス内の人間関係においても馴染めていないことが多く、疎外感を持っていることが多い。そのため、例えばクラス内でペアを作って活動する際に、組む相手が見つからない、好きな

人とペアになれないなど、あることがきっかけで突然参加意欲を失ってしまい、活動を放棄してしまうことがある。このように、普段から潜在的にある、個人的な問題やクラス内での問題が、リトミックの活動によって表面化してしまい、人間関係のトラブルや、活動の中断に発展しているのではないかと考えられる。

また、言葉が理解できずにリトミックに参加することも、外国人の園児にとっては苦痛である。三宅(2015)の、発達障害児の音楽授業におけるリトミックの研究によれば、発達障害児が授業から離れてしまう原因は、不注意や多動性、衝動性を特徴とする障害だけではなく、認知の特性により内容が理解できないことにも要因があり、授業に再び参加するきっかけは「わかる」ことであると述べている。言葉の理解に起こる問題行動においては、外国人園児にも共通しているのではないだろうか。

4. ダルクローズと多様性

リトミックの発案者のダルクローズは、多様性をどのように捉えているだろうか。ダルクローズは自身の論文「リトミックと盲人教育」で、障がい者の感覚を高めるために、リトミックが重要な役割を果たすことができるとの見解を示している⁶⁾。視覚障害者にリトミックを行うことにより、集中力を高め、好奇心を目醒めさせ、想像力の発展や表現を高め、周囲との対話への願望を高めるなど、人間のさまざまな能力を高めることができる可能性を示している⁷⁾。当初、ダルクローズは、リトミックを音楽専門の学生を対象に行っていたが、次第に音楽専門外の様々な年齢層の人々や障がい者の指導を行なうようになって

た。リトミックは、音楽学習歴や障がいの有無問わず、あらゆる人が参加可能の、心身ともに能力の向上が期待できる教育法となっている。

また、ダルクローズは、『音楽と人間』の「私たちの特性」において、異なる国の思考の相違について触れている。彼は、スイス国内でも、フランス語圏、ドイツ語圏などの言語の違いにより、思考や感情の大きな相違があり、この相違が、時に日常生活において不一致を招いている。しかし、祖国が有事の時は、その相違の垣根を超えて団結し、統一感が保たれているという。

ダルクローズは芸術における多様性について、次のように述べている。

芸術的観点から言えば、この多様性はよろこばしいが、しかしある場合に、自尊心や嫉妬が介入してしまった時など、それは残念なものになってしまうかも知れない。⁸⁾

思考の相違と同様に、芸術の多様性を個性として尊重しようとする人々がいる一方で、その相違を理解しない人々もいる。この場合、ダルクローズは、人種の差異が生み出す、異なる表現にインスピレーションを得ることを勧めている。一方で、ダルクローズは異なる文化の対立について、

これらの対立はほとんど全て、競争心を目覚めさせ、防衛本能を強化し、そして私たちの思考の形式を刷新するための活力となる反応を呼び起こすことができる。ある家庭において、気質の違いは時には口論を引き起しはしても、人間という存

在を平静の状態にさせて、心を再び調和させる瞬間を心地よく受け止められるようにしてくれるのと同じように、対立する感覚や感情の衝突も芸術家のうちに新しいエモーションと活力を回復させてくれるような平穏を生み出してくれる……。教育という観点からすれば、私たちの芸術の進展に最も幸運な影響をあたえるのは、自分とは完全に異なる気質をもった教師によることがしばしばある。⁹⁾

芸術における対立や口論は、互いの異なる思考が刺激となり、その結果、自身の思考に新しい表現や、アイデアを生み出すことができるようになると、ダルクローズは分析している。園児が異なる動きを始めると、補助をする保育者が他の園児と同じ動きをさせようとすることがあるが、異なる動きを「違和感」とせず、指導者は「新しい表現」として受け止め、クラス全体への提示に繋ぎ、活かす必要がある。

そして、ダルクローズは異なる民族のリズム感覚について、「気候、習慣、歴史的、経済的環境などの影響により、各々の民族の中に、リズム間におけるある程度の相異が生まれている」¹⁰⁾と考える。身体の造りや筋力、気質や反応が、民族によって異なるため、それらを基に、身体のリズムが創られる。ダルクローズは、リズム感覚に特に優れた民族を選ぶことは困難だとしながらも、いくつかの国々においては、リズム的能力が、他の国より遅れていると指摘する。しかし、彼は「この能力は、筋肉感覚や旋回感覚ばかりでなく、神経組織全体の状態や特定状態によって左右されるものなのであるから、教育によって容易に変えられると想定して差し支えあるまい」¹¹⁾

とリトミックで解決することができる考えを示している。

ダルクローズは、異なる考えやアイデアの対立が、自身への刺激となり、その結果新しい表現やアイデアを生み出すことができると肯定的に捉えている。また、多様な人種や身体能力差にもリトミックは適した活動であると主張している。

5. 多文化保育における子どもへの対応

現在、保育園では子どもたちにどのように対応しているのだろうか。ある自治体での保育者の自由記述による調査報告によれば、子どもが安心できるように、できるだけ同じ保育者が個別の対応を行っているという¹²⁾。リトミック指導者が保育園で指導する場合、保育者は活動の補助にあたるため、クラス担任が1人の場合でも、クラスに外国人が少数であれば、個別に対応が可能である。次に、言語コミュニケーションの問題は、イラストや写真を使った視覚的な支援を行い、日本語を話す際はゆっくり、時間をかけて、繰り返し、わかりやすく話しかける配慮する必要がある。リトミックで絵カードを使い、昆虫の単語を発音しながら手を叩く活動を行った際、外国人園児にカードを見せると、英語で単語を発し、興味関心を示していた。このことから、リトミックでも視覚的な教材は、コミュニケーションをする上で役立っているといえる。

三井ら(2018)によれば、現在の日本の多文化保育が、「異質な言葉や文化をいかに日本に近づけるか」という、日本語や日本文化を中心とした方針になっているのではないかと指摘する¹³⁾。例えば、フィンランドでは、子どもが保育園の時から自分で物事を決め、大人は個人を尊重する傾向がある。つまり、保

育者に限らず、大人は子どもに我慢させたり、無理をしたりしないように配慮する¹⁴⁾。ヴァンドレスパーも、リトミックのレッスン中に起こりうる妨害の一つに「強制的にレッスンに参加させられた場合」を挙げているため、欧米では、本人が活動をやりたくない場合は無理に参加をさせていないのではないだろうか。最近では日本でも個人の意思を尊重する傾向になりつつあるが、各国の教育方針や傾向を理解することは今後の多文化保育において必要である。

6. まとめ

多文化保育への対策は、子どもの対応のみならず、行政や自治体、外国人保護者への対応やサポート、保育者への多文化保育に関する教育など、まずは環境整備を整えることが急務である。保育園での生活の活動の一部として派遣されるリトミック講師は、外国人園児への対応や、使用する歌の教材の選定を工夫するなど、今後指導内容においても多様な文化への対応が増えていくだろう。

保育園でのリトミックは、お稽古事として保護者同伴で参加するリトミックと違い、子どもたちは保育園の活動の一部として参加させられている。異国の地で、保護者が不在の中、楽しく活動をするためには、指導者や保育者が安心できる存在であることが重要である。リトミックには音楽のみならず、言語や顔の表情など、さまざまなコミュニケーション手段がある。言語の問題においては、イラストなどを用いて視覚的な支援を行いながら、ゆっくりと丁寧に、わかりやすい言葉で説明すると良い。また、表情やジェスチャーにも気を配り、言語では補いきれないコミュニケーション手段を活用することが必要だ。

ダルクローズ自身が、多様な人々を対象にリトミックを行っていたことから、インクルーシブ教育に理解が深く、リトミックが多文化教育に適しているといえる。そして、異なる考えの対立の問題も、他者との「違い」を見つめることにより、自身の新たな表現となることを示唆している。

しかし、このリトミックにおける多様性の受容と、現在の日本での多文化保育に対する方針——日本文化習慣を軸とした教育方針、が相容れず、結果として、個人の表現を尊重することが、十分にできていないのではないだろうか。現在の日本の多文化保育の基準に合わせてリトミックを行っていると、リトミックで体験できるはずの創造性や表現力が失われてしまうのではないだろうか。そのため、指導者は、保育者と連携を取りながら、幅広い視点を持って指導にあたる必要がある。指導においては、異なるものを「異質なもの」として捉えるのではなく、「新しいもの」として捉え、指導や子どもたちの表現に活かしていくことが必要である。

引用文献

- 1) 林悠子 (2023). 「保育者の見解から見る多文化保育における困り感の文脈」4『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会, p.194.
- 2) 同上, p.195.
- 3) バンドゥレスパー, エリザベス (2012). 『ダルクローズのリトミック：リトミック教育のための原理と指針』石丸由理訳, ドレミ楽譜出版社, p.18.
- 4) 同上, p.18.
- 5) 同上, p.20.
- 6) 板野和彦 (2015). 「ジャック＝ダルクローズによるリトミックの応用とその広がりに関する研究

——「リトミックと盲人教育」、『身体運動の協調と非協調』に着目して——」日本ダルクローズ音楽教育学会 (編). 『リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して』, 開成出版, p.9.

- 7) ジャック＝ダルクローズ, エミール (1986). 『リトミック・芸術と教育』板野平訳, 全音楽譜出版社, p.123.
- 8) ジャック＝ダルクローズ, エミール (2011). 『音楽と人間』河口道朗訳, 開成出版, p.45.
- 9) 同上, pp.45-46.
- 10) ジャック＝ダルクローズ, エミール (2003). 『リズムと音楽と教育』山本昌男訳, 全音楽譜出版社, p.234.
- 11) 同上, p.235.
- 12) 林悠子 (2023). 前掲書, p.197.
- 13) 三井真紀・石井章仁・林悠子・韓在熙・松山有美 (2018). 「保育現場にみられる多文化共生と環境構成の原理 (1) : A幼稚園の事例から」48『紀要visio』, 出版社不明, p.18.
- 14) 三井真紀・石井章仁・林悠子・韓在熙・松山有美 (2022). 「韓国・オーストラリア・米国・フィンランドの多文化保育実践に関する考察 (1)」21 (2) 『心理・教育・福祉研究：紀要論文集』九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科, p.113.

参考文献

- 相田まり (2021). 「幼児教育におけるリトミックのインクルーシブ教育への示唆：小林宗作におけるリズムと社会の関係に着目して」60『東京大学大学院教育学研究科紀要』東京大学大学院教育学研究科, pp.95-104.
- 板野和彦 (2015). 「ジャック＝ダルクローズによるリトミックの応用とその広がりに関する研究——「リトミックと盲人教育」、『身体運動の協調と非協調』に着目して——」日本ダルクローズ音楽教育学会 (編). 『リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して』, 開成出版, pp.9-20.
- 喜始照宣・長江侑紀 (2017). 「多文化保育における

多文化保育におけるリトミックに関する一考察

- 保育者のストラテジー：横浜中華保育園を事例に」11『田園調布学園大学紀要』田園調布学園大学, pp.189-208.
- ジャック＝ダルクローズ, エミール (1986). 『リトミック・芸術と教育』板野平訳, 全音楽譜出版社.
- ジャック＝ダルクローズ, エミール (2003). 『リズムと音楽と教育』山本昌男訳, 全音楽譜出版社.
- ジャック＝ダルクローズ, エミール (2011). 『音楽と人間』河口道朗訳, 開成出版.
- 高倉弘光 (2015). 「日本の小学校教育におけるジャック＝ダルクローズの教育の活用に関する一考察」日本ダルクローズ音楽教育学会(編). 『リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して』, 開成出版, pp.123-132.
- 羽田野真帆 (2021). 「領域「人間関係」における文化的多様性の位置づけに関する検討：「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の内容分析」15『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』常葉大学浜松キャンパス, pp.147-153.
- 林悠子 (2023). 「保育者の見解から見る多文化保育における困り感の文脈」4『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会, pp.193-204.
- バンドゥレスパー, エリザベス (2012). 『ダルクローズのリトミック：リトミック教育のための原理と指針』石丸由理訳, ドレミ楽譜出版社.
- 松井いずみ (2016). 「インクルーシブ保育におけるリトミック活動の観察を通して」49『駒沢女子短期大学研究紀要』, 駒沢女子短期大学, pp.11-20.
- 松山有美・石井章仁・韓在熙・林悠子・三井真紀 (2021). 「多文化保育に関わる保育方法の実践と課題—保育者の「困り感」と視覚教材に注目して—」13『日本福祉大学子ども発達学論集』日本福祉大学子ども発達学部, pp.13-22.
- 三井真紀・韓在熙・林悠子・松山有美 (2017). 「日本における多文化保育の政策・実践・研究の動向と課題」47『紀要visio』九州ルーテル学院大学, pp.31-41.
- 三井真紀・石井章仁・林悠子・韓在熙・松山有美 (2018). 「保育現場にみられる多文化共生と環境構成の原理(1):A幼稚園の事例から」48『紀要visio』九州ルーテル学院大学, pp.15-20.
- 三井真紀・石井章仁・林悠子・韓在熙・松山有美 (2022). 「韓国・オーストラリア・米国・フィンランドの多文化保育実践に関する考察(1)」21(2)『心理・教育・福祉研究：紀要論文集』九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科, pp.105-116.
- 三宅浩子 (2015). 「音楽授業における対象理解とリトミック導入の意義—発達障害児の能力の個人内差と音楽学習の関係—」日本ダルクローズ音楽教育学会(編). 『リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して』, 開成出版, pp.155-166.

